第１節　　国　　語

第１　本資料の活用について

１　作成の基本的な考え方

⑴　小学校学習指導要領、小学校学習指導要領解説（国語編）及び埼玉県小学校教育課程編成要領を踏まえ、学習指導・評価計画を作成する際の参考となるよう、国語科における指導計画の作成から学習評価の考え方、実際までを系統的かつ具体的に取り上げて作成した。

⑵　教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出すことをねらい、「学校教育目標の実現をねらった教育課程の編成、適切な実施・評価、必要に応じた改善」の一連のサイクル（カリキュラム・マネジメント）を具体的に示している。

２　取り上げた内容

第１　本資料の活用について
第２　国語科における学習指導と評価
　１　育成を目指す資質・能力の三つの柱について
　２　国語科における「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善について
　３　「言葉による見方・考え方」を働かせる指導のポイントについて
　４　国語科における「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の評価について
　５　観点別学習状況の評価の観点について
第３　国語科における学習評価の評定への総括例
　１　単元における観点ごとの評価の総括例
　２　学期末における観点ごとの評価の総括例
　３　学年末における観点ごとの評価の総括例
第４　単元の指導と評価の計画及び改善
　１　単元計画の作成と評価及び改善の考え方
　２　単元の指導計画における評価規準の作成例
　３　単元の指導と評価計画例
第５　本時の学習指導（学習指導案）と評価及び改善
　１　本時の学習指導と評価及び改善の考え方
　２　学習指導案の事例

指導計画作成の留意事項

編成要領（編Ｐ36）で示された「指導計画作成に当たっての留意すべき事項」との関連についても本資料で示していく。

⑴　「特別な配慮を必要とするなど課題を抱えた児童への指導」の視点
⑵　「主体的・対話的で深い学び」の視点
⑶　「教科等横断的」な視点
⑷　「社会に開かれた教育課程」の視点
⑸　「道徳教育の充実」の視点
⑹　弾力的な指導に関する事項
⑺　学校図書館などの活用に関する事項
⑻　情報機器の活用
⑼　〔知識及び技能〕に関する配慮事項
⑽　「Ａ話すこと・聞くこと」、「Ｂ書くこと」、書写に関する配慮事項
⑾　「読書」及び「Ｃ読むこと」に関する配慮事項
⑿　低学年における他教科や幼児教育との関連についての事項
⒀　教材についての配慮事項

３　本資料の活用に当たって配慮すること

⑴　国語科の特質を踏まえること
　国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。児童が言葉に着目し、言葉への自覚を高められるように指導と評価の工夫をする。

⑵　指導計画に即した学習評価を行うこと
　実態に即して作成した年間指導計画等を基に、各単元において育成する資質・能力を明確にするとともに、単元の評価規準に基づいて場面を精選し児童の具体的な姿を見取ることで評価する。

⑶　学校、家庭、地域の実態に合った指導計画を立てること
　学校、家庭、地域の強みを生かした指導計画とするために、国語科の学習内容が他教科等の学習に結び付くように、他教科等の内容の系統性や関連性を考慮しながら計画を立てる。

４　学力・学習状況調査等の活用

　全国学力・学習状況調査については問題を活用し、問題の中で具体的に示された「児童・生徒に身に付けさせたい資質・能力」を捉えながら授業改善に生かすようにする。本資料では、本県の課題の一つでもある「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを形成すること」と関連する事例を掲載した。（Ｐ32参照）

　埼玉県学力・学習状況調査については結果を活用し、一人一人の学力の伸びや学習方略、非認知能力の状況等を把握しながら指導の工夫改善を図るようにする。その際「復習シート」等を活用する。

第２　国語科における学習指導と評価

１　育成を目指す資質・能力の三つの柱について

国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定するとともに、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している。(解Ｐ６参照)

	知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
教科の目標	日常生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。	言葉がもつよさを認識するとともに，言語感覚を養い，国語の大切さを自覚し，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

「知識及び技能」は、個別の事実的な知識や一定の手順のことのみを指しているのではない。国語で理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く「知識及び技能」として身に付けるために、思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められるなど、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」は、相互に関連し合いながら育成される必要がある。また、「学びに向かう力、人間性等」の、教科及び学年等の目標において挙げられている態度等を養うことにより、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の育成においても一層の充実が期待される。

２　国語科における「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善について

国語科の特質に応じて効果的な学習が展開できるよう、以下の点等に配慮して授業改善を行う。(解Ｐ153参照)

⑴　単元など内容や時間のまとまりの中で、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面を適切に設定すること

⑵　対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面を適切に設定すること

⑶　学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面を効果的に設定すること

⑷　児童や学校の実態に応じ、多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てていくこと

⑸　単元のまとまりを見通した学習を行うに当たり、基礎となる知識及び技能の習得に課題が見られる場合には、それを身に付けるために、児童の主体性を引き出すなどの工夫を重ね、確実な習得を図ること

さらに、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

３　「言葉による見方・考え方」を働かせる指導のポイントについて

「言葉による見方・考え方」を働かせることについては、次のように示されている。

> 言葉による見方・考え方を働かせるとは，児童が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。(解Ｐ154参照)

「言葉による見方・考え方」を働かせる指導のポイントは、育成したい資質・能力に適した言語活動を構想し、同じ意味をもつ言葉でも相手や状況に応じて使い分けたり、ある文章を一読した際に捉えた言葉の意味を文脈に即して捉え直したりするなどして、自らが理解したり表現したりする言葉に、より自覚的になる授業とすることであると考えられる。

「資質・能力」を育成する過程で「見方・考え方」が働き、「資質・能力」が育成されることで「見方・考え方」も豊かで確かなものとなると考えられる。

４　国語科における「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の評価について

「学びに向かう力、人間性等」には、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分と、観点別学習状況の評価や評定にはなじまない部分（感性、思いやりなど）がある。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、単に挙手の回数や毎時間ノートをとっているかなど、性格や行動面の傾向を評価するということではない。「評価の観点及びその趣旨について」（P19参照）に照らして、「知識及び技能」を習得したり「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかという、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の二つの意志的な側面から適切に評価することが重要である。

具体的な評価方法の例としては、右記のものが挙げられる。これらの状況を、評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることが考えられる。その際、国語科の特質に応じて、児童の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。

＜具体的な評価方法（例）＞
○ノートやレポート等における記述内容
○授業中の発言の内容
○教師による行動観察
○児童による自己評価や相互評価

５　観点別学習状況の評価の観点について

学習指導要領の目標及び内容が、資質・能力の三つの柱に基づいて整理されたことを踏まえ、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点で評価を行う。国語科においては、内容のまとまりが「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の二つで示されている。これを基に「内容のまとまりごとの評価規準」を設定する。なお、「学びに向かう力、人間性等」における「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、観点別評価を通じて見取り、「感性、思いやりなど」については個人内評価を通じて見取る。

(1)　学習評価の進め方について

単元（題材）における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めることが考えられる。なお、複数の単元にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

評価の進め方	留意点
１　単元の目標を作成する	○　学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえて作成する。 ○　児童の実態、前単元（題材）までの学習状況等を踏まえて作成する。
２　単元の評価規準を作成する	
３　「指導と評価の計画」を作成する	○　１、２を踏まえ、評価場面や評価方法等を計画する。 ○　どのような評価の資料（児童の反応や作品など）を基に、「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり、「努力を要する」状況（C）への手立て等を考えたりする。
授業を行う	○　３に沿って観点別学習状況の評価を行い、児童の学習改善や教師の指導改善につなげる。
４　観点ごとに総括する	○　集まった評価の資料やそれに基づく評価結果などから、観点ごとの総括的評価（A、B、C）を行う。

⑵　評価の観点及びその趣旨について

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	日常生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使っている。	「話すこと・聞くこと」,「書くこと」,「読むこと」の各領域において，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり，思いや考えを広げたりしながら，言葉がもつよさを認識しようとしているとともに，言語感覚を養い，言葉をよりよく使おうとしている。

⑶　学年別の評価の観点の趣旨について

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
第1学年及び第2学年	日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けているとともに，我が国の言語文化に親しんだり理解したりしている。	「話すこと・聞くこと」,「書くこと」,「読むこと」の各領域において，順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えをもっている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり，思いや考えをもったりしながら，言葉がもつよさを感じようとしているとともに，楽しんで読書をし，言葉をよりよく使おうとしている。
第3学年及び第4学年	日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けているとともに，我が国の言語文化に親しんだり理解したりしている。	「話すこと・聞くこと」,「書くこと」,「読むこと」の各領域において，筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えをまとめている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり，思いや考えをまとめたりしながら，言葉がもつよさに気付こうとしているとともに，幅広く読書をし，言葉をよりよく使おうとしている。
第5学年及び第6学年	日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けているとともに，我が国の言語文化に親しんだり理解したりしている。	「話すこと・聞くこと」,「書くこと」,「読むこと」の各領域において，筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり，思いや考えを広げたりしながら，言葉がもつよさを認識しようとしているとともに，進んで読書をし，言葉をよりよく使おうとしている。

⑷　「内容のまとまりごとの評価規準」(「単元の評価規準」) について

学習指導要領の「２　内容」には、「育成を目指す資質・能力」(指導事項) が示されている。これは、そのまま単元 (や題材) の目標となるものである。「育成を目指す資質・能力」(指導事項) の文末を「～すること」から「～している」(児童が資質・能力を身に付けた状態) と変更することで、「内容のまとまりごとの評価規準」になる。なお、国語科においては、「内容のまとまり」が、単元や題材などの一定程度のまとまりのことになるため、「内容のまとまりごとの評価規準」を「単元の評価規準」とすることができる。

国語科における「内容のまとまりごとの評価規準」は、以下の手順で作成する。

ア　国語科における「内容のまとまり (単元)」と「評価の観点」との関係を確認する。

「内容のまとまり」

〔知識及び技能〕	〔思考力，判断力，表現力等〕
⑴言葉の特徴や使い方に関する事項 ⑵情報の扱い方に関する事項 ⑶我が国の言語文化に関する事項	A　話すこと・聞くこと B　書くこと C　読むこと

「評価の観点」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度

イ　「観点ごとのポイント」を踏まえ、「内容のまとまり（単元）ごとの評価規準」を作成する。

(ア)「知識・技能」のポイント

基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を「～している」として、「知識・技能」の評価規準を作成する。育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。

(イ)「思考・判断・表現」のポイント

基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項について、その文末を「～している」として、「思考・判断・表現」の評価規準を作成する。育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。

評価規準の冒頭には、当該単元（や題材）で指導する一領域を「(領域名）において、」と明記する。

(ウ)「主体的に学習に取り組む態度」のポイント

国語科の「学年別の評価の観点の趣旨」(P19参照）において、主として「粘り強い取組を行おうとする側面」に関しては「言葉を通じて積極的に人と関わったり」が対応する。また、「自らの学習を調整しようとする側面」に関しては「思いや考えをもったりしながら（まとめたりしながら）(広げたりしながら)」が対応する。これらを踏まえ、当該単元（や題材）で育成する資質・能力と言語活動に応じて評価規準の文言を作成する。

評価規準については、〔知識及び技能〕を獲得したり、〔思考力、判断力、表現力等〕を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、その粘り強い取組を行う中で自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価するため、特に粘り強さを発揮してほしい内容と、自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動を考えて授業を構想し、評価規準を設定することが大切である。このことを踏まえ、以下の①から④の内容を全て含め、単元（や題材）の目標や学習内容等に応じて、その組合せを工夫して作成する。文末は「～しようとしている」とする。

①粘り強さ　　＜　　＞内は、考えられる表現の例
　＜積極的に、進んで、粘り強く　等＞
②自らの学習の調整
　＜学習の見通しをもって、学習課題に沿って、今までの学習を生かして　等＞
③他の２観点において重点とする内容
　(特に粘り強さを発揮してほしい内容)
④当該単元（や題材）の具体的な言語活動
　(自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動)

(5)　内容のまとまりごと（単元）の評価規準を手順に沿って作成する例

＜第１学年及び第２学年「Ａ　話すこと・聞くこと」＞

ア　紹介や説明、報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて声に出して確かめたり感想を述べたりする活動を通した指導の評価規準の例

指導事項のうち、当該単元において評価しない部分は、一部削除してもよい。

各指導事項の文頭に「領域名」を入れる。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにしている。(〔知識及び技能〕(1)オ)	・「話すこと・聞くこと」において、相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えている。(〔思考力、判断力、表現力等〕A(1)イ) ・「話すこと・聞くこと」において、話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもっている。(〔思考力、判断力、表現力等〕A(1)エ)	・進んで（①）、相手に伝わるように話す事柄の順序を考え（③）、学習の見通しをもって（②）、紹介しようとしている（④）。 ③は、特に粘り強さを発揮してほしい内容 ④は、自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動

文末を「～している」にする。

⑹　個人内評価の扱いについて

国語科に関わりの深い「感性や思いやりなど」の、観点別学習状況の評価や評定にはなじまない部分については「個人内評価」とし、児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する。また、個人内評価の対象となるものについては、児童が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童に伝えることが重要である。

第３　国語科における学習評価の評定への総括例

１　単元における観点ごとの評価の総括例（Ｐ７参照）

「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の中で記録に残すものについては、単元の評価規準に基づき、「指導と評価の計画」に示した時間や学習活動のまとまりごとに、その実現状況を見ていく。その上で、時間や学習活動のまとまりごとに行った評価結果を総括する。

まず、児童の学習状況を把握する際に、観点ごとの評価規準に照らし「おおむね満足できる状況」（B）と判断する状況の例を踏まえ（第４を参照）、下記のような【評価メモ】を作成し、評価結果を累積することが有効である。【評価メモ】には、「評価の観点」「単元の評価規準」「時間」「評価の材料・評価方法」「おおむね満足できる状況（B）」「評価」「単元における評価」などを配している。

【評価メモの例】

観点	知識・技能			思考・判断・表現				主体的に学習に取り組む態度		
単元の評価規準（※◎印は重点）	①			①（◎）	②			①		
時間	２・３・４	単元における評価	備考	２・３・４	５・６・７	単元における評価	備考	２・３・４	単元における評価	備考
評価材料 評価方法	カードの記述の確認			ワークシート①の記述の確認	発言・行動の観察とワークシート③の記述の確認			ワークシート②の記述の確認		
おおむね満足できる状況（B）										
児童１	B	**B**	調査の遅延を促した	B	B	**B**		B	**B**	
児童２	B	**B**		A	B	**A**	聞き手に伝えるための効果的な表現について記述あり	B	**B**	
児童３	A	**A**	見たことについて思ったことを加えて…	A	A	**A**	自分の経験と関連付けた感想あり	A	**A**	友達のカードの並び順に助言あり

「おおむね満足できる状況」（B）と判断した児童のうち、さらに質的な高まりや深まりが見られた児童は、「十分満足できる状況」（A）と判断する。「努力を要する状況」（C）の状況の児童に対しては、「おおむね満足できる状況」（B）を実現するために行った指導を備考欄等に記録することで指導の継続性が保たれ、児童一人一人の資質・能力の向上につながる。

また、表中の「単元における評価」は、単元の学習を終えた時点で、児童がどのような状況にあるのかを記録している。表中の「思考・判断・表現」のように場を変えた２種類の評価を行う場合は、両方の観点の実現状況を合わせて総括する。この２つの評価が異なる場合については、学校であらかじめ基準を決定しておく必要がある。一方で、表中の「児童２」の例のように年間指導計画において重点化が図られた上で、本単元で重点的に指導し評価する内容を踏まえた場合は、重点目標における学習状況を重視することも考えられる。国語科の指導内容が、螺旋的・反復的に繰り返しながら能力の定着を図ることを基本としていることに留意し、年間を見通して当該単元の目標や単元の評価規準を設定することが重要になる。

２　学期末における観点ごとの評価の総括例（Ｐ７参照）

学期末における観点ごとの評価の総括については、各単元の【評価メモ】を観点別の補助簿に転記する方法が考えられる。記入は、ABC の評価または数値で行う等、各学校で確認をする。総合評価を行う際、単なる合計や平均等のみで決めるのではなく、評価を行う時点での各児童の実態や能力、重点指導事項の学習状況を踏まえた上で、判断することが重要である。

【観点別学習状況の評価の補助簿例】

第○学期（○期）国語科 知識・技能		○	◎	学期末の評価
1	児童１			
2	児童２			

第○学期（○期）国語科 思考・判断・表現		○	◎	学期末の評価
1	児童１			
2	児童２			

３　学年末における観点ごとの評価の総括例（Ｐ７参照）

国語科は学習指導要領の改訂により、５観点から３観点に変更となるため、一つ一つの観点の評価の評定への影響力が変わることに留意する必要がある。なお、評定は第３学年以上で扱う。

指導要録については、「AAA」は「３」、AAB、ABA、BAA は「２か３」、BCC、CCB、CBC は、「１か２」というように各学校で基準を決めておく必要がある。

第４　単元の指導と評価の計画及び改善

１　単元計画の作成と評価及び改善の考え方

⑴　単元の評価規準の作成のポイント

小学校国語科においては、次のような流れで授業を構想し、評価規準を作成する。

【単元の評価規準の作成のポイント】

Step 1
単元で取り上げる指導事項の確認

○年間指導計画等を基に、単元で取り上げる指導事項を確認する。
○前後の学年の指導事項を確認し、系統的な指導ができるようにする。

Step 2
単元の目標と言語活動の設定

○Step 1 で確認した指導事項を基に、以下の３点について単元の目標を設定する。
⑴「知識及び技能」の目標
⑵「思考力、判断力、表現力等」の目標
→⑴⑵については、基本的に指導事項の文末を「～できる」として示す。
⑶「学びに向かう力、人間性等」の目標
→⑶については、いずれの単元においても当該学年の学年目標である「言葉がもつよさを～思いや考えを伝え合おうとする」までの全てを示す。
○単元の目標を実現するために適した言語活動を、言語活動例等を参考にして位置付ける。

Step 3
単元の評価規準の設定

○単元の評価規準を作成する。
「知識・技能」の評価規準の設定（P20参照）
〔知識及び技能〕の指導事項の文末を「～している」として作成する。
「思考・判断・表現」の評価規準の設定（P20参照）
〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項の冒頭に、指導する一領域を「(領域名)において」と明記し、文末を「～している」として作成する。
「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の設定（P20参照）
①粘り強さ、②自らの学習の調整、③他の２観点における重点、④言語活動、を全て含め、単元の目標や学習内容等に応じて組合せを工夫し、文末を「～しようとしている」として作成する。

Step 4
単元の指導と評価の計画の決定

○各時間の具体的な学習活動を構想し、単元のどの段階でどの評価規準に基づいて評価するかを決定する。
○評価場面を精選する。

Step 5
評価の実際と手立ての想定

○それぞれの評価規準について、実際の学習活動を踏まえて、「おおむね満できる」状況（Ｂ）の例、「努力を要する」状況（Ｃ）への手立てを想定する。

⑵　単元の指導の評価を基にした授業改善

以下の点に留意して授業改善を図る。

①　学習評価を児童の学習改善につなげる。

・　単元や題材などの内容のまとまりの中で、児童が自らの考えを記述したり話し合ったりする場面や、他者との協働を通じて自らの考えを客観的に捉え直す場面を設定すること
・　学習評価の方針を事前に児童と共有する場面を必要に応じて設け、児童自身に学習の見通しをもたせること

② 学習評価を教師の授業改善につなげる。
- 評価規準や評価方法を事前に教師同士で検討して明確化し、共有すること
- 単元の評価計画を基に、学習を通して目指す児童の姿を明確にし、一時間ごとの指導事項を意識した授業を展開すること
- 児童が自らの理解の状況を振り返ることができるようにすること

2 単元の指導計画における評価規準の作成例

Step 1
○単元で取り上げる指導事項を、年間指導計画等を基に確認する。

Step 2
○指導事項等を基に、三つの柱に基づく単元の目標を設定する。
○単元の目標を実現するために適した言語活動を、学習内容を踏まえ言語活動例等を参考にして位置付ける。

Step 3
○「知識・技能」「思考・判断・表現」については、指導事項を用いて評価規準を作成する。
○単元の評価規準を設定する際、該当する指導事項を用いて示すことで、学習指導要領との関連が明確になる。

Step 4
○各時間の具体的な学習活動を構想し、単元のどの段階でどの評価規準に基づいて評価するかを決定する。
○評価場面を精選する。

1 単元名・教材名 読んで考えたことを伝え合い、物語の続きをつくろう「ごんぎつね」

「単元名」は、どのような資質・能力を育成するために、どのような言語活動を行うのかが児童に分かるように工夫する。

2 児童の実態と本単元の意図

3 単元の目標

⑴ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすることができる。（〔知識及び技能〕(1)オ）

⑵ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。（〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ）

⑶ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。（〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)カ）

⑷ 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして思いや考えを伝え合おうとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

「学びに向かう力、人間性等」の目標は、年間を通して育むため、学年目標を示す。（読書を取り上げない単元等も同様）

4 単元で取り上げる言語活動
物語を読んで考えたことを伝え合い、物語の続きをつくる。（関連：言語活動例イ）

指導要領解説に記載されている「言語活動例」以外の言語活動も考えられる。

5 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにしている。(⑴オ)	①「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。（C⑴エ） ②「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。（C⑴カ）	①進んで登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて、今までの学習を生かしながら続きの話をつくろうとしている。

指導事項の文末を変えて、評価規準を作成する。

文末を「～している」にする。

各指導事項の文頭に「領域名」を入れる。

6 指導と評価の計画（全 12 時間）

	主な学習活動	学習内容	指導上の留意点・評価
1・2	○今までの物語の学習を振り返り、学んだことを伝え合う。 ○単元を見通し、ゴールを確認する。 ○全文を読み、感想や話し合いたいことをまとめる。	○物語の構造や読み方 ・登場人物の心情の変化を捉えて読むこと	○場面の移り変わりや情景描写から、登場人物の心情の変
3	○登場人物の様子が表れている叙述について話し合い、登場人物の気持ちと性格を想像する。	○登場人物の行動・会話・様子を表す言葉	【思考・判断・表現①】 ノート ・登場人物の性格を捉える叙述を見つけ、自分の考えを整理して書いているか確認する。
12	○兵十が加助にごんのことを話す場面として書いた第７場面（続きの話）を読み合い、単元の学習の振り返りをする。	○友達の感じ方との共通点・相違点	【思考・判断・表現②】 ノート ・感じ方の違いについての記述を確認する。

「指導事項に係る事項」を記入する。（本時で評価しない、主な指導事項も記入するとよい。）

日々の授業の中では、児童の反応を確かめる等、学習状況を適宜把握して指導の改善につなげる評価を行っていく。

観点別学習状況の評価については、毎回の授業ではなく、実現状況を把握できる段階で行うなど、場面を精選することが重要である。

「単元の評価規準」について評価する時間には、評価方法と「おおむね満足できる」状況（B）の例を示す。